

特集

アテネパラリンピック戦記

鈴木 徹

今秋、障害者の最高峰のスポーツ大会であるパラリンピックがアテネで開催されました。私は前回のシドニー大会に引き続き2度目のパラリンピックに出場しました。2000年のシドニー大会は、1メートル78センチで6位という結果でした。自身としては、1メートル85センチの自己記録で試合に臨みましたが、試合を重ねるごとに記録が伸びていきましたので、正直、本番では自己ベストがでると思っていました。しかし、実際は自己記録を大きく下回り、惨敗に終わりました。敗因としては、競技場の大きさ、観客の多さ、他言語での競技進行など何もかもが新しい体験で、小さなパニックを起こしてしまったことにあると思います。また、シドニー大会は緊張というより圧倒された感じで、地に足がついておらず、あっという間に試合が終っていました。

シドニーから4年が経ち、その間のトレーニングを積みアテネパラリンピックを迎えました。1度パラリンピックを経験済みでしたので、現地に入ってから自分を見失うことなく、試合まではリラックスした状態で生活を送ることができていました。食事面は日本にいるときよりも活動量が減りますので、腹八分を目安にバランスよく摂取しました。その結果、体重増もなく、体調を崩すこともありませんでした。フィジカル面は良い状態で、本番を迎えました。試合当日、会場に入場してもシドニーのような圧倒された感じはなく、地に足がついている自分がいました。試合直前に行われる助走練習や公式練習でもミスはなく、身体は思うように動いていました。競技が始まり、私は前回同様、1メートル75センチから跳び始めました。1メートル75、1メートル80とも一回目で成功し、良い流れにのれると思ったときでした。つづく1メートル85を失敗し、普段、失敗しない高さということもあり動揺しました。それが

マイナスの方へ動いてしまい、修正できないまま残りの跳躍を続け、残り2本とも失敗しました。結果は1メートル80センチで6位でした。私は「こんなはずではない。俺は2メートルを跳びにきたのだ。」と心中では叫んでおり、ショックを隠しきれませんでした。その反面、自分へのプレッシャーから解放されたので、非常にすっきりした気分になりました。

今大会を振り返ると、フィジカル面は完璧だったのですが、テクニカル面に不足があったと思います。自身、現地に入るまでに勝負できる状態までもっていきましたが、日に日に理想とする動きから崩れていってしまい、本番を迎えた時にはマイナスの動きが働いており、理想の動きからはかけ離れていました。勿論、動きが変わってしまったのは私自身の未熟さもありますが、それよりも2週間半も前に現地入りさせて、コーチなしで調整していくというのが問題だと思います。2週間半も前に入るのでしたら、オリンピック選手のように選手村に入村後、近隣国に行き1試合をふんだ上で臨むことも可能だと思います。もしそれが駄目なら、試合日程を考慮した上で入国を前団と後団に分けるという形もとることができると思います。今回、私は最終日でしたので、日を追うごと試合を終えた選手が増えていき、運悪く私の部屋の前にはロビーがあり、そこでは試合の様を





生中継で放映していましたが、試合を終えた選手はリラックスモードに入り、夜遅くまでテレビを観ていました。そんな中、私は試合に向けてモチベーションを高めている最中であつたので、平静さを保つのが大変でした。前後団と別れていたら前団の選手は帰国していますので、そのような問題は起きなかつたと思います。パラリンピック日本選手団は資金不足と言われてますが、資金がないのではなく、無駄使いが多いということだと思います。オリンピック選手と同じスーツやジャージを着ているのに、なぜ渡航の面では違ってくるのが理解できません。勿論、今回の選手団用に一機チャーターして行ったことは協会にとって安心感はあると思いますが、実際は車椅子の選手を機内へ運ぶのに陸上のスタッフがどれだけ汗を流し、立位の選手達はどれだけの時間待たされたかという情報はいっていないと思いますので、誰のための大会かを問いかけてくなりました。

前回は、車椅子と立位の選手が別棟で生活をしましたが、今回は車椅子の方との共同生活となりました。日本の試合や合宿等でも車椅子の選手たちと生活をする機会がありませんでしたので、どんな苦労があるのかと思っていましたが、パラリンピックに来ている選手だけあって何もかも全て自分でやっており、気を遣うことがなかつたことは良かったと思いました。しかし、日を重ねるごとに車椅子の障害クラスや選手の状況が理解でき、それは同時に車椅子選手の裏側をみる結果となつてしまいました。私の切断のクラスは外見で障害の区分が決定してしまうので何もできませんが、車椅子の選手は医師の判断と実際の競技している状況を見て障害のクラスを決めます。逆に言えば、実際の競技している状況で力を温存すれば本来のクラスよりも不利のクラスに振り分けられ、選手

にとっては有利に働くことになるということです。海外の選手の中にこれを上手く利用した選手がいましたが、日本にも数人いたと思います。動く手にわざと逆の手を補って重度に見せていた選手、試合で力を温存している選手などがおり、その選手がメダルをとった時は、本人に「罪悪感はないのか。」と尋ねたくなつたと同時に、その行為はドーピングと同じではないかとさえ思いました。

オリンピックの競技は男女の2クラスしかなく、視聴者にとってみても分かりやすいので、素直にメダリストを評価できます。しかし、パラリンピックは障害のクラスが多く、クラスによつても競技レベルが違つるのでメダリストだけでは評価しがたいものであるにも関わらず、メディアはメダリストだけを取り上げているのが現状です。私は現地に来ていた記者に「各競技のレベルは理解していますか。メダリストだけしか評価してもらえないのですか。」と尋ねたところ、記者は「競技レベルが分からないので、メダルで評価するしかないのです。」と言う回答でした。パラリンピックは選手でさえも評価基準が分かりませんのでメディアの方のこの意見は適切だと思いました。でも、私の切断のクラスで今大会優勝するには、100メートル走で10秒台、走り高跳びでは2メートルといった日本で言うところのインターハイのレベルと変わらないので、そのクラスで戦っていることに対する評価は全くないのが非常に残念です。

近年、パラリンピックではメダルの価値を高める動きが始まっており、シドニーからアテネまでに18種目の種目がなくなりました。そして、次の北京大会ではアテネから50種目がなくなつていわれています。そうなると、違う障害クラス同志の統合に始まり、パラリンピックは複雑さを加速させていくと共に、勝利至上主義が前面に押し

出されていくと思います。以上のようなことを踏まえた結果、私は今大会を経験したことで、私の中でのパラリンピックに対する魅力は薄れました。

記録さえ達していれば、オリンピックの舞台で 1 人の人間として純粹に戦ってみたいのが本心であります。